

『お正信偈』に「大悲無倦常照我」というお言葉があります。「大悲」とは「大慈悲心」です。お釈迦さまは、『仏説観無量寿経』の中で、阿弥陀仏のお心を「大慈悲」と称えられています。「大」が付く「慈悲」なのです。ここであえて何故「大」を付けて称えられるのでしょうか？「大」は勝れているという意味での「大」なのです。悟りを獲た方にしか解らない境地で、阿弥陀さまのお慈悲のお心は、他のたくさんの仏さま方のお慈悲よりも勝れていると見抜いて「大慈悲」と仰せになるのです。

どこがどう勝れているのか？ それは、「どんなものも必ず救おうと働いて下さっている。」と云うことです。

「無倦」とは、親鸞聖人はこのお言葉をご和讃の中で、「ものうきことなく」と読んでおられます。しかも、これに対してわざわざ「おこたりすつるところなしとなり」と解釈を付けて説明下さっています。「怠ることなく、見捨てることない」ということは、休む暇なく働きづくめだという意味で、次の「常照我」の「常」に続くお言葉です。阿弥陀仏のお慈悲は、この私に向けて休む暇もなく常に働き続けて下さっています。救う側の阿弥陀さまは、「休む暇なく、常です」が、救われる側の私は「時々で、たまにで、そんな中やっ」となので、救う側と救われる側の対応の違いがあります。

こんな詩を残した方があります。『いつみても、大悲の親は立ち通し、救われる身は、寝たり起きたり』 私たち浄土真宗のご本尊さまは、立つておられる阿弥陀如来さまです。その立ち姿の阿弥陀さまをいつも仰ぎ礼しながら、自分自身の有り様を省みて詠われたものなのでしょう。いつも阿弥陀さまは立ちつくして、私を救おうと働いてくださっている。それなのに私は、いつやら寝てしまったり、気が付いたら起きています。そんな中で、やっと確かなお救いに出会えたんだ。と喜ばれて読まれた詩だと思えます。

「大悲無倦常照我」のお言葉に、絶え間ない繰り返し「お育て」の中を生かされている喜びを頂くことです。

